

Title	慶應義塾と建築家・谷口吉郎(記憶としての建築空間：イサム・ノグチ/谷口吉郎/慶應義塾)
Sub Title	Keio University and the Architect Yoshiro TANIGUCHI(Architectural Space as Memory : Isamu NOGUCHI, Yoshiro TANIGUCHI, and Keio University)
Author	藤岡, 洋保(FUJIOKA, Hiroyasu)
Publisher	
Publication year	2005
Jtitle	Booklet Vol.13, (2005.) ,p.10- 21
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000013-04211344

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾と建築家・谷口吉郎

藤岡 洋保

はじめに

慶應義塾のために建築家・谷口吉郎（1904-79）が設計した建物は少ない。谷口が慶應義塾のキャンパス形成に少なからず寄与したということだが、三田キャンパスに関しては、萬來舎の取り壊しによって、彼の作品はすべて姿を消すことになった。たいへん残念なことではあるが、ここで慶應義塾における谷口作品の意味について考えることは、キャンパスという空間に込められた一建築家の意図を再考するだけではなく、今後のキャンパス計画に示唆を与える一助にもなると思われるので、谷口の思想と作品について、慶應義塾の建物を中心に述べることにしたい。

建築家・谷口吉郎

谷口は金沢の九谷焼の窯元の長男として生まれた。地元の第四高等学校を経て、東京帝国大学の建築学科を1928（昭和3）年に卒業し、大学院に進学した。同級生には、やはり日本を代表する建築家になった前川國男（1905-86）がいる。

1930（昭和5）年から、谷口は東京工業大学に勤務した（65年まで）。東工大は前年に大学に昇格したばかりで、しかも大岡山に移転したばかりだったので、キャンパス整備が緊急課題だった。谷口は教育・研究のかたわら、その設計にも参加することになった。

彼が設計を担当した最初の建物は《水力実験室本館》（1932）である。これは鉄筋コンクリート造2階建ての、中央部が吹き抜けになった実験室であり、処女作とは思えないほどデザインの完成度の高い建物で、日本の近代（主義）建築の初期の代表例のひとつになった。

当時は日本に近代（主義）建築が導入されはじめた時期で、同級の前川はパリに赴き、その旗手であるル・コルビュジエ（1887-1965）のアトリエで学んでいた。谷口もこの新しい建築に強い関心を寄せていた。近代（主義）建築は、過去の様式を用いることを否定し、合理主義をベースに、機能を

重視し、科学技術の成果を活用しつつ、線や面などの抽象的な要素の構成で美がつくられるとするものだった。

初期の谷口は、機能や技術もさることながら、特に環境工学に手がかりを求め、採光や通風に配慮することからデザインしようとしていた。たとえば、《自邸》(1935)では、太陽高度から庇の出を決めたり、窓割りを上下三分割にして、通風の必要に応じて多様な窓の開け方ができるようにした。そして、そのような窓割りを利用して立面を整えようとしていた。要するに、このころの谷口は、合目的性をテーマにデザインしようとしていたのである。

前川國男に刺激されたせいかもしれないが、彼は外遊を希望していた。恩師・伊東忠太(1867-1954)のはからいでそれが実現し、1938(昭和13)年に彼はベルリンに出張する機会を得た。その日本大使館の庭園整備の監督がその名目だった。翌年に第二次大戦がはじまって帰国せざるを得なくなるまで、約1年間ベルリンを中心にヨーロッパの建築を実見したことが、そしてその後の戦時という厳しい時期に思索のときを過ごしたことが、戦後の彼の作風を大きく変えることになった。

そのきっかけとしてよくいわれるのが、シンケルの建築との出会いである。カール・フリードリヒ・シンケル(1781-1841)は、19世紀のドイツを代表する建築家である。19世紀の建築家らしく、複数の過去の建築様式を使いこなしたが、多くの建築家に参照されたのはその新古典主義の作品である。それらは当時興隆しつつあったプロイセンの国威を宣揚する役割を担うものだった。ベルリンやその周辺には、《王立劇場》(1821)や《アルテス・ムゼウム》(1828)など、シンケルの代表作が点在していた。

東京工業大学水力実験室本館
(『建築雑誌』1933年7月号から)

アルテス・ムゼウム

谷口はベルリンでの体験を『雪あかり日記』（東京出版、1947）に記している。これは雑誌『文芸』に連載されたのをまとめたものだが、その連載がはじまったのは1944（昭和19）年で、帰国から5年も経ってからだったし、その後谷口は何度か手を入れ続けているので、事実の記録というより、むしろ文学作品と見るべきものである。ちなみに、谷口は文筆家としても知られる。

そこで谷口がはっきり宣言しているのは、古代ギリシャ建築への賛美である。時代を超えて迫ってくる、その端正で気品ある姿へのオマージュである。そして、それと同様の特質をシンケルの新古典主義の建築に見て、高く評価しているのである。実際には、谷口はベルリン到着直後からシンケルに注目していたわけではなかったようだが、戦時の逼塞した状況の中で、美への渴望が、形式美の典型である古典の賛美というかたちで現れたのかもしれない。

この時点で谷口の関心は、形の記念性や象徴性に移っている。合目的性は建築においてはもちろん重要だが、それから建築の形を決定することはできないこと、むしろ時代を超えた価値は形の記念性や象徴性にあることを、ヨーロッパでの体験を反芻しながら、彼は悟ったように思われる。そのような思いをシンケルの建築に仮託して語ろうとしたのだろう。

記念性や象徴性に対する好みは、実は処女作の《東工大水力実験室本館》に暗示されていた。その南立面の列柱には新古典主義に通じる美意識が感じられるし、後の彼の作品に繰り返し表れる、縦長のプロポーションへの好みもうかがわれる。

『雪あかり日記』では、装飾も否定されていない。装飾にも彼は形の象徴性を見、その存在を肯定しているのである。

過去の建築へのオマージュ、そして形の記念性や象徴性、装飾への関心は、近代建築家としてはかなり異例である。過去の建築様式を適用することや装飾を否定すること、その一方でより新しいことに最大の価値を見ることが近代建築家のとるべき態度とされていたからである。

しかし、谷口は自分の美学に忠実であることを選んだ。このことが戦後の建築界における彼の位置をユニークなものにした。1948（昭和23）年に彼が出版した本のタイトル『清らかな意匠』（朝日新聞社）が、戦後の彼のテーマを集約している。端正で、記念性を感じさせる建築。これが彼がめざしたものである。それは、1階よりも2階を少しオーバーハングさせ、緩勾配の屋根かヴォールト屋根を架け、窓は縦長で、それがサッシュでさらに細かく縦長に分割されることによって表現された。細かいピッチの縦格子が配されることもあった。これが彼が好んだ手法であり、三田キャンパスの建築群ではじめて採用され、その後くりかえし使われた。

『清らかな意匠』とともに、谷口が好んだ言葉に「意匠心」がある。「意匠心」は、造形に向かう作者の心のあり方を意味し、形（結果）よりもそれをつくる姿勢を重視するという、谷口のロマン主義的な姿勢を示すもので

藤村記念堂

ある。

このような姿勢が反映したのが博物館明治村の創設である。谷口は、四高の同級生土川元夫（当時名鉄社長）とともに愛知県犬山に博物館明治村を1965（昭和40）年に開設し、初代村長をつとめた。彼は鹿鳴館（1883）が1940（昭和15）年にひっそりと取り壊されるのを悲しみ、東京日日新聞にそれを惜しむ文章「明治の愛惜」を寄せたことがあり、すでにそのころから、文明開化の時代に、西洋渡来の新しいモチーフに触発されつつ、稚拙ながらも新しい建築をつくらうとした明治の建築家や職人の心意気を高く評価していたのがわかる。そこには、モノづくりに打ち込む人々への共感がうかがえる。

戦後の谷口の最初の仕事は、1947（昭和22）年竣工の《藤村記念堂》と《徳田秋声文学碑》である。どちらも記念性がテーマになるものだった。

《藤村記念堂》は、島崎藤村（1872-1943）を記念して、長野県馬籠の生家跡につくられた、木造平屋の建物である。馬籠の村民が計画し、敗戦直後ということで、地元の材料を使って村民が総出でつくりあげた。藤村の生家は本陣・庄屋・問屋だったが、その建物は焼失していた。谷口は、その焼け跡に砂を敷くだけにして往時を偲ばせ、その端に記念堂を低く配した。異様なほど平面が細長い建物だが、焼け跡側の立面は両端を横長の白壁にして引きしめるなど、一見さりげないが、プロポーションを重視した構成は巧みである。内部では、藤村文学の「暗さ」を手がかりに、入口から少しずつ自然光の流入量を絞り、暗くなったその奥に左の窓から照らされる藤村座像を置くという方法で、奥行きと深みのある空間をつくりだした。

碑は記念性をひとつの形で象徴的に表現しようとするものである。徳田秋声の文学碑にはじまり、谷口は多くの碑を設計した。それらは、屏風や折り紙、骨壺、石棺など、具体的なものに想を得てそれを抽象化し、石で表現したものが多い。

戦後の谷口は、《志賀直哉邸》（1955）のような住宅だけではなく、《秩父セメント第二工場》（1956,58）、《千鳥ヶ淵戦歿者墓苑》（1959）、《東宮御所》（1960）、《ホテル・オークラのメイン・ロビーとダイニング》（1962）、《資生堂会館》（1962）、《東京国立博物館東洋館》（1968）、《東京国立近代

美術館》(1969)、《料亭・柿傳》(1969,70)、《料亭・河文水かがみの間》(1972)、《迎賓館別館》(1974)、《日本学士院会館》(1974) など、多くの作品を手がけた。それらの功績により、1961(昭和36)年に日本芸術院賞、1973(昭和48)年に文化勲章を受けている。

慶應義塾の谷口作品

慶應義塾のために谷口が設計した建物は、確認できるものだけでも14件(うち1件は碑)に及ぶ。それをキャンパス別に列記すると次のようになる。

<天現寺>

幼稚舎校舎(曾禰中條建築事務所と共同、1937)／鉄筋コンクリート造3階建
一部2階建

幼稚舎講堂(自尊館、1964)／鉄骨鉄筋コンクリート造2階建

幼稚舎百年記念棟(1976)／鉄筋コンクリート造3階建一部4階建

ほかに終戦直後に木造仮校舎の「自尊館」(講堂)を設計したらしい。

<日吉>

大学予科日吉校舎(1938)／鉄筋コンクリート造3階建

普通部校舎(1951)／鉄筋コンクリート造3階建

<三田>

通信教育部事務室(1949)／木造、一部鉄筋コンクリート造2階建

第三校舎(四号館、1949)／木造2階建

学生ホール(1949)／木造2階建

女子高等学校校舎(1951)／木造2階建

第二研究室(萬來舎、1951)／鉄筋コンクリート造2階建

<信濃町>

医学部付属病院七号棟(特別病棟、1954)／鉄筋コンクリート造5階建

医学部基礎医学第一校舎(1956)／鉄筋コンクリート造4階建

医学部第三校舎(1957)／鉄筋コンクリート造4階建

<その他>

慶應義塾発祥記念碑(1958)／中央区明石町の聖路加病院前、石造

慶應義塾と谷口との関係は戦前からで、幼稚舎にはじまる。慶應の理事の榎智雄(その子息の榎文彦氏は世界的に有名な建築家)が1932(昭和7)年頃に谷口を訪ね、「塾の建築に魂を入れてほしい」と設計を依頼したのがきっかけという。その後、40年以上にもわたって、慶應はおりに触れ、谷口に設計を依頼した。その作品は、校舎だけではなく、寄宿舍、講堂、研究室から、病院や碑に至るまで、多様である。これは小泉信三塾長(当時)をはじめとする慶應の上層部が谷口を評価していたことを示している。そして、谷口もその信頼に応えるべく、力を尽くしたのである。

谷口が慶應との関係を好ましく思っていたことは、『建築に生きる』(日本経済新聞社、1974)に「慶應義塾と私」という章を設けていることから

うかがえる。日経新聞に谷口が連載した「私の履歴書」をまとめたものだが、そこで彼は、「私は慶應義塾の出身ではない。しかし、塾との関係は永く続いていて、四十数年に及ぶ。そのため塾員となっている」(p.67)と述べ、幼稚舎、三田の第三校舎、学生ホール、萬來舎を設計したことに触れた後で、「そのほか慶應義塾には普通部、中等部、女子高校、医学部の特別病棟など、私の関係した建築は多い。戦後の苦しいときであったので、いっそう私には励みとなった」(p.70)と記している。そのほかにも、彼は非常勤で、文学部の美術史学の専攻で建築史の講義を隔年で続けていた。

谷口のクライアントでこれほど長く、また多くの仕事を彼に依頼した例はほかにはない。35年間勤務した東京工業大学においてすら、《水力実験室本館》(1932)、《建築材料研究所》(1933)、《70周年記念講堂》(1958)の3作品にすぎない。その点で谷口が慶應に感謝するのはよく理解できるし、そこでの一連の作品は、彼の建築を語るうえでは必ずすことのできないものなのである。それを年代順に追っていくと、先述の谷口の作風の変化を見てとることができる。

まず、《幼稚舎校舎》だが、慶應義塾がなぜ谷口を設計者に選んだかは定かではない。依頼したのが、先述のように1932(昭和7)年頃ということならば、谷口はまだ30才になっておらず、それまでに完成させた建物は《東京工業大学水力実験室》だけだった。そのような若い建築家に名門校・幼稚舎の校舎の設計を依頼するというのは大英断といわなければならない。後から振り返れば大変な慧眼といえるのだが、実績のない若者に任せるという決定はトップでなければ下せなかっただろう。慶應義塾ではちょうど小泉信三(1888-1966)が塾長に就任する頃(1933)で、厳密な前後関係は不明だが、新塾長の最初の決断のひとつだったのかもしれない。ちなみに、慶應は、当時の日本を代表する設計事務所だった曾禰中條建築事務所を谷口のサポートにつけて実施設計を担当させ、万全を期した。

幼稚舎は先進的な教育を行っていたことで知られる。たとえば、1898(明治31)年に児童の生活様式を完全な洋式に改めた。1910(明治43)年に新設した理科教室と実験室は、小学校における特別教室のはしりといわれている。そのほかにも、英語教育や図画・唱歌の特別実習、林間学校など、情操を育むためのカリキュラムが充実していた。高い理想を掲げてその実践をめざす小学校で、日本の他の小学校をはるかにしのぐ存在だったのである。

その幼稚舎が小学校としてはかなり広い天現寺の敷地に新校舎を建設することになった。その校舎は鉄筋コンクリート造3階建て(一部は2階建て)で計画された。全体は、シンプルな箱型の組み合わせで、外壁は白く塗られていた。そこで谷口が留意したのは、「健康第一主義」で、採光と通風に最大限配慮することだった。そのために彼は、教室の校庭・テラス側の開口部全体を6枚のガラス扉にし、それを両サイドに畳み込んだうえで外に回転して、床から長押(その上は天井面までガラス窓)までが全面開放できる

慶應義塾幼稚舎校舎

ようにした。そして、上階をセットバックして、1階からはもちろん、2、3階でも教室からそのままテラスに出られるようにした。3階の教室横のテラスには、照り返しを防ぐために芝生を植えた。

暖房にはパネル・ヒーティングを採用した。これは国内での実績がないということで父兄などから反対があったようだが、それを押しきって実現し、結局は喜ばれる設備になった。この建物が完成した1937（昭和12）年においては学校建築ではきわめて珍しい設備で、小学校では同年竣工の東京市立永田町小学校で採用された例があるだけである。

また、理科教室は低学年用と高学年用に分けて2つ設けるという充実ぶりで、谷口はそこに十字形の特製の実験機をデザインした。

《幼稚舎校舎》には、谷口の初期の作風、つまり環境工学的配慮をもとにデザインするという姿勢が明瞭に表れている。そしてそれをシンプルな形にまとめたことが高く評価される。この建物は、2000（平成12）年に、世界に残る近代（主義）建築の好例をリストアップしつつその歴史的価値の重要性を訴える国際組織DOCOMOMOの日本支部の20選（現在は100選に拡大されている）に選定されたが、それは上記のような先進性と優れたデザインが評価されたからである。

《幼稚舎校舎》に示された理想主義的な姿勢は大学予科の《日吉寄宿舍》（1938）にも見受けられる。この寄宿舍では、高台の南端に、3棟の寄宿舍が平行ではなくやや扇形に開くかたちで配置されている。これはフィンランドのアルヴァ・アアルト（1898-1976）設計の《パイミオのサナトリウム》（1933）を思わせるやり方で、開放感や見晴らしを考慮したためだろう。寄宿舍棟はシンプルな箱形で、頂部に薄い庇がまわり、無装飾の白い外壁に、2つずつセットになった横長窓が整然と並び、暗紫色のサッシュと西妻側の避難階段で変化がつけられていた。当時としては珍しい1人1室タイプで、1階西端に食堂と談話室を配し、食堂からテラスに出て、食後の会話が楽しめるようになっていた。そして敷地の南西端には円形平面の浴場が設けられ、その大きなガラス窓やテラスから眼下の景色を一望できた。敷地の特性を生かした設計で、寄宿舍棟は直方体のヴォリュームで、浴場は円筒形のヴォリュームにして、つまり機能別に異なる形を与えてその組み合わせを重視するという、近代（主義）建築の教義や美学にしたがったデ

ザインといえる。

戦後に三田につくられた建物は、それらとは異なる美学にもとづいている。新しいテーマは、形の記念性や象徴性である。空襲で焼失した校舎の再建が当時の課題で、敗戦直後という厳しい状況のためだろうが、《四号館（第三校舎）》や《学生ホール》は木造で計画された。木造とはいえ、単なる仮設の校舎ではなく、高い理想に支えられたものだった。

《四号館》（第三校舎、1949）は、木造2階建ての校舎で、13の教室を収めていた。屋根は赤瓦葺きで、外壁は淡いベージュのセメント・ガン吹きつけのフラットな仕上げで、そこにセピア色に塗られたサッシュを持つ縦長の窓が細かいピッチで並び、それがところどころに設けられた縦樋や、玄関上の演習室の張り出しで変化がつけられていた。端正で、気品を感じさせる立面である。玄関部分には地面から3段高くなったところにテラスが設けられ、学生が談話できるスペースになっていた。

隣に建てられた《学生ホール》（1949）も同様の姿勢で設計されている。T字型の平面に寄棟屋根が載り、T字の縦棒の部分が吹き抜けの食堂で、翼部に研究室などが設けられた。この建物でも外壁に縦長窓が細かく配され、2階がオーバーハングして、立面に端正さと軽快感を与えていた。食堂のインテリアでは天井の棹縁や手摺などで長い直線を密に連続させて品格を感じさせるデザインとし、吹き抜けにしたこととあわせ、集まって食事するという行為に特別な意味を与えようとしている。



慶應義塾大学四号館（第三校舎）
撮影：平山忠治

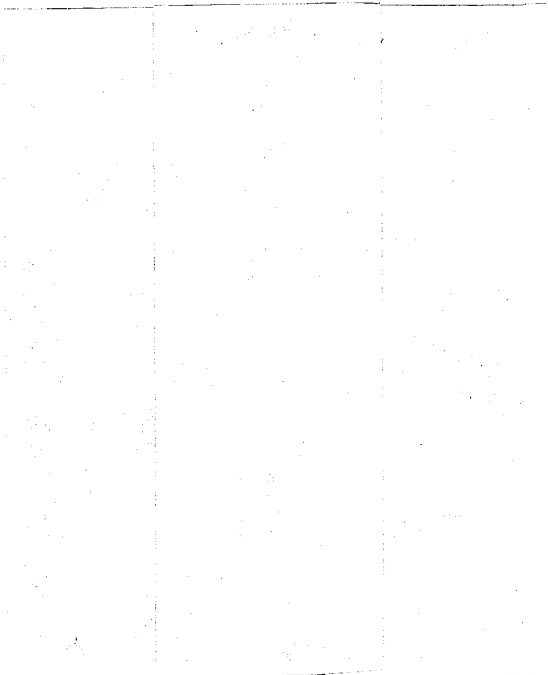
慶應義塾大学学生ホール
撮影：平山忠治

《四号館》と《学生ホール》では、美術家と協同したことも注目される。《四号館》脇には菊池一雄（1908-85）の彫刻《青年像》が配され、《学生ホール》では、食堂の吹き抜けの壁に猪熊弦一郎（1902-93）が壁画《デモクラシー》を描いた。菊池の彫刻へのアプローチを含め、谷口は、この2つの建物の外周もデザインした。当時は建築家と美術家の協同が提唱されはじめたときで、菊池や猪熊との協同はそのさきがけになるものだったし、建物単体だけではなく、複数の建物とその間の空地を含めてデザインすることで、一体的な環境形成をめざしたのである。

この2棟に続いてつくられたのが《萬來舎》（1952）である。2階建ての鉄筋コンクリート造の建物で、談話室と研究室で構成された。ここでも美術家との協同があった。父親（野口米次郎）がかつて教鞭を執っていたということで三田を訪れた彫刻家イサム・ノグチ（1904-88）と意気投合し、談話室を共同で設計した。また庭園はノグチがデザインした。談話室とその周囲との関係もよくできていた。特に、地面と床の高さの差をできるだけ少なくし、開口部を床までとって、空間の連続性を重視したのが評価される。

《演説館》（1875、1924移築）の脇に建つということもあってか、この建物では平面がくの字型に折れ曲がっている。外観は、2階がオーバーハングし、壁面全体に例の縦長窓が細かいピッチで配されている。久しぶりに鉄筋コンクリート造の建物をつくる機会を得たことが関係しているのだろうが、談話室の打ち放しの柱やシェル構造の階段など、ここで谷口は鉄筋コンクリート造による新たな造形の可能性を試している。

ノグチと谷口は、このとき三田キャンパスを「東洋のアクロポリス」に見立てたといわれる。つまり、単なる高台ではなく、学問を志す人々が集う神聖な場ととらえたのである。このころの三田の一連の谷口作品は、そ



学生ホール内に設置された猪熊
弦一郎の壁画《デモクラシー》
撮影：平山忠治

のような意識で設計されていると見てよい。当然ながら、慶應義塾の上層部の理解と支援がなければこのようなものはつくれなかっただろう。モノのない、財政的にも厳しい時代だったが、教育・研究はどうあるべきかというテーマに対して慶應義塾が高い見識を持っていたことが、この時期の建設事業からうかがわれる。そして、谷口もそれに応えるべく尽力したことによって、このような建物が実現したのである。

ちなみに、この《萬來舎》に似た設計案が、東工大百年記念館に数点保管されている。それらの図には何の説明もないため、いつ描かれたのか、また何の図面なのか、よくわからないのだが、くの字型の平面であることや、上層がオーバーハングした2階建てで、外壁に連続した縦長窓が見られることから、《萬來舎》の初期案である可能性もある。屋根はヴォールトになっている。萬來舎の計画については慶應側の資料をチェックしていないので、はっきりしたことはいえないが、この図面を見るかぎり、萬來舎よりも規模が大きく、しかも研究室棟ではなく、展示施設として計画されているように見受けられる。ちなみに、この建物は池の畔に計画されている。

信濃町の医学部のために設計した建物では、縦長窓は使われていない。これは、直接的には1950（昭和25）年施行の建築基準法が関係しているらしい。基準法が求める窓面積を確保するために、建物の種類によっては開口をより大きくとることが必要になり、連続した縦長窓が使いにくくなったのである。《特別病棟》（1954）は個室タイプのもので、谷口は衛生的で

慶應義塾大学萬來舎
（第二研究室）
撮影：平山忠治

萬來舎計画案と思われる図面
（東工大保管資料）

あることをテーマに設計したといわれる。この建物では、各階窓上に庇を連続して設け、妻壁に避難階段をつけて立面に変化を与えた。続いてつくられた《基礎医学第一校舎》(1956)では、柱間いっぱい開口部をとり、その開口部と柱・壁とでつくられるプロポーションによって格調を表現しようとしている。ちなみに、日吉の《普通部の鉄筋コンクリート造校舎》(1951)は、縦長窓の連続からより大きな開口部への移行期の作品で、開口部自体は横長だがその窓割りは縦長になっている。

これらは、その直前に三田につくられたものとは一見異なるようだが、谷口が機能重視の普通の近代(主義)建築としてではなく、病院や校舎という枠の中で、記念性や象徴性をどう表現するかを考えたものである点で、同じ建築観に則ったものと見るべきである。慶應義塾関係のその後の谷口の作品も、素材や規模は違うものの、基本的には形の記念性や象徴性をテーマにしていると見てよい。

最後に、《慶應義塾発祥記念碑》(1958)に触れておこう。これはかつて中津藩邸があった、聖路加病院前の三角形の土地につくられた石碑である。黒御影の低い直方体の台の上に、スウェーデン産の小豆色の御影石で開いた本の形がつくられ、そこに『学問のすゝめ』の有名な一節「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」が刻まれている。慶應義塾の開学精神、つまり福澤諭吉(1834-1901)の思想を『学問のすゝめ』で象徴し、そのテーマをこの一節に代表させたわけである。いかにも谷口らしいやり方といえる。

まとめ

以上のように、慶應義塾は谷口にとって重要なクライアントであり、その一連の建物には谷口の作風の変遷が刻印されている。その点で慶應義塾の谷口作品は、建築家・谷口吉郎を語るうえでは必ずすことのできないものなのである。

また、それとともに、慶應のために谷口が設計した建物を通覧して感じられるのはクライアントと建築家の関係の重要性である。いい建築は設計者だけではつukれない。クライアントの見識と建築への理解、そしてクラ

慶應義塾発祥記念碑
撮影：平山忠治

イアントと建築家の相互信頼が不可欠なのである。その点で慶應義塾と谷口の関係はその理想的なケースといえるだろう。慶應義塾には教育・研究に関して高い志があり、キャンパス整備は単に機能を満足させるためではなく慶應義塾の理念を示すことでもあるという信念を持っていた。谷口は、そのような意向に応えるべく、それぞれの時点での彼の建築観をもとに、最善を尽くそうとしたのである。

(ふじおか ひろやす・東京工業大学大学院教授／近代建築史)